SHALOM-NETWORK

発行：NPO法人シャローム事務局

〒960-1241 福島県福島市松川町字東原 17-3　Web　http://www.nposhalom.net　発行責任者：大竹静子
TEL／FAX　024-567-5322　E-mail　info@nposhalom.net

人権フォーラム in ふくしま報告書

今、福島から人権を考える

二〇一六年六月十一日、「人権フォーラムｉｎふくしま」が開催されました。震災以降、シャロームは被災地のＮＰＯとして子どもや避難者への災害支援活動を続けてきました。震災の現場に関わり地域社会の急激な崩壊を目の当たりにし、原発事故に伴うコミュニティの分断、経済優先社会の姿ー原発事故は現代社会の課題を浮き彫りにしました。震災により多くの命が失われ、身近な人たちの家族が分断される中で「命」の重みが改めて問われている。原発事故から六年目を迎えた今、事故を教訓に、これからの未来を担う子供たち、これから生まれてくる子供たち、すべての「命」を守り育てていく社会を目指した「ふくしま」からの提案を、今の「ふくしま」だから言えるものとして全国に発信しようと企画されました。

「命」に向き合い、生き続けようとする「命」を守ろうとする人間どうしの関わり、そこから生まれてきた具体的な生命尊重の活動、今回パネラーを務められたみなさんは、この実践者の方々です。長年の実践と経験は異なりますが、そこには、「命」と真剣に向き合ってきた姿がありました。

この四名の講演内容が収録され、その後の意見交換の様子も加えた報告書を現在編集しています。完成を皆さんとともに待ちたいと思いますが、完成に先立って報告書の内容を抜粋してご紹介します。（Ｔ・Ｏ）

⑴ パネリスト・千葉茂樹 氏（生命尊重センター代表・映画監督）

千葉氏は、映画監督として「マザーテレサとその世界」等を制作し、マザーテレサを日本に紹介した。このマザーテレサが、一九八一年来日本し「日本は美しい国です。しかし中絶を許している皆さんは心の貧しい国です。」と述べたことから「生命尊重運動」は始まり、マザーテレサの意思は多くの市民によって今も引き継がれている。映画監督として「命」をテーマに多くの映画製作に関わり、現在、原発事故で全村避難となった広野町の中学生と映画製作に取り組む「人権プロジェクト『ひろの映像教育』」を実践している。

⑵ パネリスト・福田雅章 氏（子どもの権利条約日本代表・弁護士）

福田氏は、法学の教授として長年活動し、子どもの権利条約の作成にも深く関わってきた。子どもの権利条約の根底には、「命の大切さ（生命の尊厳）」と「共感しあえる人が身近にいること、受容的な人間関係の大切さ（人間の尊厳）」がある。現代社会は、「人間が生命現象を支配できる」という傲慢さが支配し、様々な問題を引き起こしている。原発事故はこれを世界に気づかせてくれた。子どもの権利条約の意味を多くの人たちに理解してもらいたい。

⑶ パネリスト・永遠璃（とわり）マリールイズ 氏（ルワンダの教育を考える会代表）

ルイズさんは、日本留学から帰国後すぐルワンダ内戦が勃発、民族間の大虐殺を目の当たりにし難民キャンプの生活を強いられた。奇跡的とも言える難民キャンプでの日本人医師との出会いから、留学時の福島での縁で再度来日が実現する。「内戦という辛く悲しい体験の中から命の尊さ、平和の大切さを学びました。子どもたち学ぶことを教え、未来に希望を持てる子どもたちに育てたいとの思いが、周囲のみなさんの支援でキガリ市内にムチョムウイーザ学園として実現しました。」と語るルイズさん。二〇一二年には日本国籍を取得し、日本全国を駆け回り、命の尊さ、教育の大切さを訴える活動を続けている。

⑷ パネリスト・吉野裕之 氏（シャローム災害支援センター長・カメラマン）

二〇一一年の原発事故と放射能汚染により、福島が日本社会の中で大きなハンディを負うこととなった。シャロームは、障がい者支援のＮＰＯとして長年活動してきており、今回の事態は、福島全体が障がい者になったと同じとの判断から直ちに災害支援センターを立ち上げ、吉野氏をセンターに迎えることとなる。福島の過酷な状況下で、子どもたちを無用な被ばくから守るための活動を続けている。保養プログラム、移動教室、身近な生活範囲での放射線量測定、現地からの報告、情報発信など活動は多岐にわたる。

愛のメモ帳

「天皇陛下が、生前退位の意向」という新聞記事が、十四日の朝刊を飾った。生前退位ということが、そんなに大変なことなのか？自分の高齢化や健康状態を考え、ひきぎわを自分で決断することを表明。それが、法律改正を伴う政府の大問題、一面ぶち抜きの大見出し、象徴天皇なればこその大事件。

身の引きぎわ、それは、高齢化とともに誰もに求められる課題であるが、それを自ら決断するのはなかなか難しい。大会社の社長でもなかなか後継者にその座を渡せない。豊臣秀吉も一度は譲った秀次を殺してしまう。権力を握ると離せなくなるのが人の常のようである。

天皇、日本の象徴という特殊な地位を世襲で継承し、その運命を受け入れ、それを全うすることの大変さを思うと想像にあまりある。自らの意思を述べると世の中にこれだけ反響をもたらす立場にありながら、常に控え目で、居るだけで人々を和ませる。その姿は、お地蔵さんのようである。

世の中は、憲法改正の動きが活発化しそうな雲行きとなっている。本人の意思とは関係なく、日本の政治の頂点にあり、世襲的に継承される天皇、政治に翻弄され続ける天皇家の歴史、天皇陛下の意思が、政治の具とされ、かき消されないことを願う。（Ｔ・Ｏ）